健康福祉教育委員会 行政視察報告書

【視 察 日】　令和５年１０月３０日（月）～１０月３１日（火）
【視察委員】　鈴木岳幸委員長、多田晃副委員長、さとうまりこ委員、八木勝委員、
　　大石心平委員、山根一委員、大石保幸委員
【視 察 先】　兵庫県相生市、和歌山県和歌山市

≪１０月３０（月）　兵庫県相生市≫

【調査事項】相生市「１１の鍵」の取り組みについて

① 市の概要

石川島播磨重工業の企業城下町として栄えた相生市は昭和４９年には人口４万２千人となりピークを迎えたが、その後の造船不況などの影響を受けて人口減少が続き、平成 22 年には３万１千人にまで減少して 15 歳未満人口比率は県内でも最下位となった。

② 取組の経緯・内容

人口減少に危機感を覚えた相生市では、人口減少対策、教育子育て少子化対策、産業活性化対策の３点を重点施策として、平成 23 年度に「子育て応援都市宣言」を行い、「１１の鍵」の事業を開始した。

その内容は、１、新婚さん生活応援金（若年新婚夫婦が新生活を始める際の住宅費補助・最大６０万円、３年間住み続けた場合には追加で１５万円）、２、住宅取得奨励金（市内に住宅を新築または購入した４０歳未満の夫婦もしくは子育て世帯に２５万円助成）、３、妊活カップル応援金（体外受精・顕微授精を行う夫婦に１回５万円・年６回まで支給）、４、出産祝い金支給（出産時６万円・母子手帳交付時５万円・計１１万円）、５、子ども医療費助成（１８歳まで無料）、６、子育て応援券交付（３歳までの子がいる世帯に延長保育や任意予防接種などに利用できる応援券２万円分を交付）、７、３歳児保育事業、８、私立幼稚園預かり保育事業（４歳児、５歳児を１７時まで無料で預かり保育を行う）、９、給食費無料化（市立幼稚園、小学校、中学校）、１０、相生っ子学び塾（小学校５、６年生を対象に、国語、算数、英語の基礎学力向上のために空き教室を利用して放課後に実施）、１１、ワンピースイングリッシュ事業（幼時から中学校卒業まで、段階に応じた英語教育の総合プログラムを実施、ネイティブによる英語教育や教職員のための研修、英検検定料の半額補助など）となっており、子育て世帯に対しての様々な支援を行った。

子育て支援策を前面に打ち出すＰＲにより、近隣の姫路市などからの移住者獲得に力を入れ、人口の社会増となるなどの成果を上げた。

③ 今後の課題

取組を始めたころには先進的な取り組みであり、他市からの移住者獲得に大いにＰＲできたが、昨今では似たような取り組みを多く行う市町が多くなってきたため、相対的に優位性が弱まりつつある。子育て支援に手厚い市であることには変わりはないが、新たな施策をどのように打ち出すかが課題と言える。また、給食費や医療費の無料化は市民に喜ばれているが、今後の財政を懸念する声も一部にはある。支出が増えて財政が厳しいことも事実であり、例えば公共施設などは積極的な計画修繕を行う事はあまりできず、破損個所が出てから修繕対応を行うような状態であるという。

④ 本市に反映できると思われる点

移住定住をＰＲする動画については３部作でストーリーが構成されているものだが、大変にうまく出来ているという印象を受けた。本市でも反映してみてはどうかと思う。また、その動画を市外の映画館の上映前に流すことを実施されていたが、これも参考にされたい点である。

給食費無料化にしても高校生以下の医療費無償化にしても覚悟が必要であり、ここに見る本市の一番の課題点は近隣市町の顔色を窺って進めていくのではなく先陣を切ってやっていく事が出来るかどうかではないかと考える。相生市の事例を見て、近隣市町よりも一歩先にやる事でその事業に対する評価を得やすい事とその認知度が高まるといった効果は重要であると考える。

≪１０月３１日（火）　和歌山県和歌山市≫

【調査事項】　和歌山市民図書館の取り組みについて

① 市の概要

和歌山市は和歌山県の県都であり県最北部に位置しており、大阪府に隣接している。人口は約３５万人で紀の川の河口部にある。

② 取組の経緯・内容

昭和 56 年７月に開館した旧市民図書館は、耐震改修工事や施設整備の必要性、蔵書収蔵能力の確保や閲覧席数拡張の必要性が生じていた。更には多様化する市民ニーズやバリアフリーへの対応などから建て替えが検討された。

平成 27 年５月、市と南海電鉄との間で図書館を南海和歌山市駅へ移転することを含む駅活性化構想が発表され、翌年３月、「市民図書館基本計画」が策定された。図書館の運営に関しては指定管理者制度を導入することとなり、２社の応募の中から公開プレゼンテーションを経て、CCC（カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社）に決定した。CCC は国内の各地で図書館の指定管理を経験済みで、そのノウハウが導入され、令和２年にグランドオープンとなった。指定管理料は、５年間で約１５億円である。この金額であっても、従前よりもコストを抑えるメリットがあるという。

一階から屋上までの5層を目的別にデザインし、1Fにはカフェテリア、書店エリア、物産販売で地域の顔としての役割も持たせている。2Fはライフスタイルジャンルとして図書館分類に拘らず、自分の興味のある本を手にとりやすい並べ方、3Fは一般図書や学習室などが設けられている。4Fはこどもとしょかん、プレイスペース、地域子育て支援拠点施設、5Fは持ち込み飲食もできる開放感ある芝生広場となっている。

民間のノウハウを生かし、集客や顧客満足度の向上を行うことができ、利用者の満足度調査では、９５％以上の方が満足しているとの結果が出た。来館者数は、旧図書館の１９万人に対して令和２年度６６万人、３年度７５万人、４年度７８万人と、何倍にもなり、さらに増加が続いている。また、新図書館は、開館日は年３６５日で、開館時間も旧図書館は朝１０時から平日は２０時まで、土日は１８時までだったものが、毎日９時から２１時までと大幅に拡大し、収蔵能力も４５万冊から６０万冊、閲覧席数は２００席から５２５席、学習席も２４席から１４５席と大拡大している。

民間の運営により、おしゃれで素敵なイメージづくりにも成功し、若者から子育て世帯、お年寄りまで来館者で賑わい、駅周辺のにぎわい創出にも寄与している。１階のスターバックスでコーヒーを購入して、館内へ持ち込むことも可能であり、ドリンク片手に来館される方も多い。館内には飲食スペースも用意されており、子育て世帯の方からも好評である。学生は、スタバで飲み物を買って館内で勉強することが一種のステータスとなっているようである。

館内で飲食することに関しては、当初否定的な意見もあったというが、図書館で貸出した本を家で読むときには、飲食物を傍らに読書する人も当然いる為、図書館のみ禁止にすることには汚損を回避する明確なメリットはないとの判断によるものである。

民間の指定管理者による様々なイベントが充実していて、来館者の増員に繋がっている。毎朝９時の開館前には入り口前に行列ができ、多い時には行列は、１８０ｍ×４列にもなるというほどの盛況ぶりである。

③ 今後の課題

民間組織であるため、行政の政策動向を把握しにくく、意思疎通が困難になるのではないか、サービスが量のみによって判断され、質がきちんと保たれるか、という懸念はあるが、現時点では問題とはなっていない。

④ 本市に反映できると思われる点

図書館が、これほど人を集める力のある施設であることをよく理解し、まちづくりの中心に据えることは重要である。良い図書館には職員の専門性が必須であるとわかり、民間でありながら司書を正規化していること、安上がりで済ますことばかり追求せず、地域貢献のために質の高いサービスを提供するための正当なコストを負担することは必要である。

空間利用、バリアフリー化も含め、障がいのある方もとても利用しやすい、どこでもコーヒーが飲める、文房具の販売、お土産の販売など、取り入れられそうなことも多くある。